

I 研究主題

「主体的に活躍できる神中生の育成を目指して」
～校区小学校との連携や様々な人との関わりを通して～

II 研究計画

1 主題設定の理由

神山町は、徳島県の中央部に位置する人口約5,000人の自然豊かな町である。近年は地方創生に重きを置いた町づくりに注目が集まり、IT企業等のサテライトオフィスの開設が増え、それに伴い商店もできている。令和5年には、日本で19年ぶりとなる私立高等専門学校が開校した。校区には2校の小学校があり、スクールバスで通学する生徒が半数以上を占めている。本年度、生徒数56名、5学級（特支2）の小規模校である。

生徒は真面目で優しく、落ち着いた学校生活を送っている。全校生徒で行うグラウンド除草にも無言で取り組み、自分の役割をしっかりと果たそうとしている。一方、幼少期よりほとんど同じメンバーで過ごしており、人間関係が固定化される傾向にある。お互いのことを理解しているが故に、集団の中で切磋琢磨し、お互いを高めていくことが苦手である。また、新しいことにチャレンジし、現状を更に良くしようとする積極性を十分育成できていない部分がある。

そこで、本研究を通して小学校と連携し、異学年や地域の様々な人と関わり、多様な体験をすることで主体的に活躍できる生徒の育成を目指したいと考え、本主題を設定した。

2 研究の仮説

- (1) 様々な人と関わり、様々な価値観や生き方に触れ、コミュニケーション能力を高めることで、仲間と協力しながら主体的に学習活動に取り組めるだろう。
- (2) 小学生と中学生が体験を共有する場面を多くすることで、児童が中学校生活に円滑に移行し、その後の学習活動にも意欲的に取り組むことができるだろう。
- (3) 小中学校の教職員が連携した取り組みを行うことで、児童・生徒を多角的に理解することができ、主体的な生徒を育成するための基盤となるだろう。

3 研究の内容

- (1) 異学年の生徒や地域の人たちとの関わり
- (2) 中学校生活への円滑な移行に向けた体験の共有
- (3) 小中学校の教師の連携

III 研究の実際

1 異学年の生徒や地域の人たちとの関わり

- (1) 異学年の生徒との関わり

① 合同学習

本校の異学年活動の柱である「合同学習」は、縦割り班での体験的参加型の人権学習である。学期に1回行われ、卒業までの9回で全てのカリキュラムを学習する計画となっている。



初めに話し方や聞き方の約束を確認し、与えられたテーマについて班長が話し合いを進めていく。班で話し合ったことを全体で共有する時間があり、班の中だけでなく、全校生徒の前で積極的に発言する生徒の姿が見られる。生徒が意見を出し合う中で様々な価値観に触れ、互いの考えを認めるとともに学年の枠を越えて自他を大切にする態度が育っている。

② 自分たちで創りあげる学校行事「神中祭」

神中祭は、全校生徒で組織する神中祭実行委員会によって企画・運営される。生徒主体で体育の部（競技）、文化の部（展示やパフォーマンス）、模擬店の計画・準備等を行う。全校で行う創作ダンスは、3年生のダンス担当者が振付けを考え、練習でも前に立ち、3年生主導で進める。



様々な活動の準備や当日の運営まで、異学年で協力し、生徒主体で取り組むことで、仲も深まり、成長していく姿が見られた。

③ 縦割り清掃活動

異学年と協力し、主体的に清掃を行うことをねらいとし、縦割り班での清掃活動を行っている。班別会議で分担場所を決定し、決まった手順を漫然と行うのではなく、汚れている所を探したり、掃除方法を相談したりしながら取り組んでいる。上級生が指示や助言をする姿が見られるようになってきた。

(2) 地域の人との関わり

① 職場体験学習

林業関係や飲食店、IT企業など様々な事業所と連携して、職場体験学習を行っている。少人数の強みを生かし、令和4年度は、生徒が希望する分野の事業所に1人ずつという手厚い学習環境で実施できた。近年は、町の地方創生戦略を実現していくために設立された一般社団法人「神山つなぐ公社」と連携し、内容の充実を図っている。学校と町とを繋ぐ役割を担ってくれる神山つなぐ公社と連携することで、生徒はより多種多様な事業所で体験学習を行えるようになった。働くことは大変だというイメージを強くもっていた生徒も、学習後にはやりがいや楽しみを感じるという変容がみられた。

② 卒業生と語る会

卒業生と語る会は生徒と年齢の近い20代の卒業生が結成した「神中サポーターズクラブ」の中心メンバーによって企画・運営されている。年齢の近い先輩の話聞くことで数年後のイメージを明確にすることをねらいとしている。先輩を囲んで様々な質問をするという形で行われ、卒業生は自らの進路決定や中学校生活の思い出とともに、働くことや勉強することの大切さを話してくれた。生徒は、年齢の近い先輩達の話から、現在の努力が数年後の自分の状況に大きく関わることを感じとっていた。



③ 大人としゃべり場（トークフォークダンス）

大人としゃべり場では、地域の大人たちと神山町の良いところや、仕事、学校生活で失敗したことなどのテーマについて相手を変えながら1分ずつ話をした。最初は緊張し

ていた生徒もすぐに打ち解け、お互い笑顔で話をしていた。たくさんの地域の大人たちの思いや多様な生き方に触れることができた。また、初対面の大人たちと、とても楽しそうに話をしている姿が印象的だった。神山つなぐ公社と連携することで、20代から70代の様々な年代・職種の大人たちに参加して頂くことができた。



2 中学校生活への円滑な移行に向けた体験の共有

(1) 校区小学校の運動会

出身小学校の運動会に参加し、選手や競技役員として小学生や地域の方々と協力して運動会を盛り上げている。児童・生徒が一同に集まり、保護者や地域の方が加わる年に一度の貴重な機会であり、小学生は中学生の力強い走りや機転を利かした行動を見て自分たちの数年後の姿と重ね、中学生はお世話になった小学校の先生や後輩達に成長した姿を見てもらうことができる行事である。

(2) 体験入学

校区2校の6年生を招き、体験授業や生徒会による中学校生活の説明や、各部活動で撮影した映像での部活動紹介などを行っている。中学校生活にふれてもらい、入学後のスムーズな学校生活への移行をねらいとしている。体験授業では、中学校の授業の雰囲気を感じ、中学校の教師と関わる機会ともなった。実施後には、中学校の学習に対する不安が小さくなったことや、入学を楽しみにする感想がみられた。また、事後のアンケートで質問を受け、回答を掲示物にして両小学校で掲示している。



(3) 新入生交流会

校舎の内外に用意された生徒会執行部と5つの部活動で企画したイベントを新入生が班に分かれて回るスタンプラリー形式で行った。各部活動の紹介とともに脱出ゲームや的当てゲームなど工夫を凝らしたゲームが用意されていた。入学して間もない時期に校舎に慣れ、先輩とたちともたくさん交流することができ、とても楽しい時間を過ごしていた。

3 小中学校の教師の連携

(1) 小中学校若手教員の合同研修

3校の若手教員による研修会を実施した。令和3年度はオンライン会議の参加方法を知ることが目的の1つとして、オンラインでの自己紹介、今後の研修計画の確認をした。しかし、それ以後の計画は、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となった。令和4年度からは若手教員の代表者で、GIGAスクール構想での小・中9年間のタブレット活用能力について育成計画の作成を進めている。研修の中で、互いの学校の児童生徒の状況についても情報交換することもできた。

(2) 校種間の授業参観

小中学校の指導方法や内容を知り、お互いの指導に生かすことを目的として、授業を参観し合っている。展開の仕方や目配りのポイントなど、たくさんの刺激を受け、授業後にはコメントカードを使って感想などを伝え合った。授業研修だけでなく次年度以降の入学生の様

子をうかがい知ることできる。

(3) 中学校から小学校への乗り入れ授業

令和4年度には中学校の音楽教諭が近隣の神領小学校6年生の音楽の授業を担当した。また、限られた時数ではあるが英語教諭がTTとして5年生の英語の授業に加わった。児童は中学校教諭のピアノ演奏や歌唱指導、英語の発音などにふれることで中学校での授業を楽しみにするとともに、進学後も顔なじみの先生がいるという安心感を得ていた。また、乗り入れ授業を行った教師は新入生の状況を知ることができるため、入学後の指導に生かすこともできた。

IV 研究の成果と課題

1 成果

- 多くの人たちと関わることでコミュニケーション能力も磨かれつつある。その結果、道徳の授業中に自分の言葉で考えを話す生徒や、学校行事に主体的に取り組む生徒が増えつつある。学校評価アンケートで生徒からは以下のような回答が得られた。

学校評価アンケートでの以下の項目における肯定的な回答の割合

	令和2年度	令和3年度	令和4年度
ペアやグループ等の話し合い活動では、積極的に考えを言えている。	78%	86%	94%
積極的に自分の意見を述べ、主体的に授業に取り組んでいる。	59%	96%	80%

- 小学生が中学校との関わりをもつことで、新入生は、よりスムーズに学校生活をスタートさせられるようになったと感じられる。先輩と仲も良く、廊下で楽しそうに会話している姿もよく見られる。
- 小中学校間での公開授業や研修等を通してお互いの学校の現状や授業の雰囲気を知ることができた。連携を深めることで児童生徒のことや授業のことなど、相談しやすい関係を築くことができつつある。
- 地域の人たちとの関わりの中では、神山つなぐ公社が学校と地域をつないでくれており、多様な活動を実現することができている。さらに神山つなぐ公社が積極的に学習活動に関わってくれるため、地域と学校が連携して教育活動に取り組んでいる実感がある。

2 課題

- 想定された場面では挨拶もよくでき、自分の考えを発信することができつつあるが、想定していない場面でのコミュニケーションは苦手としている生徒が多い。また、主体的に活動に取り組む生徒がいる一方で、集団行動を基本とする学校生活に適応しにくい生徒もいる。生徒のニーズに応える柔軟な対応をしていくとともに、地域との連携による多様な教育活動の在り方を考えていく必要がある。
- 小中学校の連携については、校区の小学校2校とバランスをとりながら進めていくことの難しさを感じた。さらに発達段階の違いもあるが、小中で指導方法に違いがあることも感じられる。今後も小中連携を継続し、情報交換や意見をお互いに言い合える関係を築き、一人一人の成長の過程に向き合う学習活動を考えていきたい。